

『女人
成仏 血盆経縁起』

菅野則子

『女人
成仏 血盆経縁起 完』

本史料は、A5判、本文五枚および表紙・裏表紙併せて七枚綴り、和綴じの木版刷物である。表紙には、表題の「女人成仏 血盆経縁起 完」の右下に「下總一部村」、左下に「正泉寺蔵板」、末尾には「尾州御大奥為 御祈禱令開板者也」「維時天保九戊戌歲十月吉祥日」と記されている。

本史料作成の所以は、この村が「日本最初女人成仏血盆経出現第一道場」と記されていることにあるようだ。まず、本文の冒頭に、「血盆地獄」の概要が記されている。すなわち、女が、何故地獄に墮ちるのかを、血穢と関わりせながら述べた上で、それを悲しんだ目蓮尊者が女人を救うために釈迦牟尼仏へ嘆き訴え、経を説き示してもらったものが血盆経とも女人成仏教とも言われるもので、女人が、十悪五逆の罪を負っても、この血盆経を受持して読誦すれば、地獄に墮ちることなく成仏できると。

このように女性の罪深さ、それを救うのが血盆経を読誦することであるとし、それをわかりやすく説くために、一つの事例「法性寺の不思議」の話が記される。それは、次のようなものであった。村の旦那の十三歳になる娘

が、奇妙な病いにかかり、医者にみせても陰陽師に占ってもらっても一向に験がなかった。ある時、病人である娘が口走った。話したいことがあるので法性寺の和尚を呼ぶようにと。出向いてきた和尚と娘とのやりとりでさらに話は進められていく。娘は、自らの宿因を語ると言って、おもむろに話しはじめた。彼女は、最明寺時頼の娘尼御寮法性という比丘尼であり、法性寺を開いた住持であったが、栄華を誇り三業を慎まなかったので地獄に堕ち、無量の苦を受け、その上、業縁により手賀水中の蛇身となり三熱に苦悩している、この血の池の苦患を遁れるには作善しなくてはならない、そのためには、血盆経を七日間、毎日一千卷ずつ読誦し書写しなければならぬと述べた。

さらに娘は、寺の背後のある五輪の石塔に自分の遺骸が埋められていること、また法性寺の本尊は父最明寺殿であるとも語った。そして和尚に、寺に戻って本尊に祈り血盆経を求め、それで供養をしてくれるようにと訴えるや、病人の娘はそのまま寝入った。

和尚が帰寺してのち、不思議な思いにとらわれつつも娘の言う通りに、地藏講会を執り行い、礼拝恭敬したあと眠りにつくと、夢に老僧が現れ告げて言うには、和尚は志願深いので「竜宮界に納めた血盆経を与える」と。夢覚めて、老僧の指示に従って手賀浦に行ってみると、水中俄に動き白蓮花一茎が涌出、その中に经文があった。血盆経であった。和尚は寺に戻り、七日のあいだ、その血盆経を読誦・書写してのち、比丘尼の墓所へ納めたといいう。

すると七日経った夜半、和尚や檀家はともに同じ夢を見た。それは、蛇身となっていた尼（ここでは病にとりつかれた娘をさす）が、血の池地獄を脱し、弥陀の浄土へ往生していくというものであった。

このような不思議な一件にあやかり、経文が一部、涌出したことから村の名を古名「發戸村」から「一部村」に変え、寺の山号を「大龍山」とし、水泉が涌出ことにより寺名「法性寺」を「正泉寺」と改めたと記し、この縁起は結ばれている。

そしてこれは、尾州大奥のために刊行したものであると記されているが、全文にふり仮名が付けられており、多くの女性たちにわかり易く戒めを説いたものとして注目される。江戸時代における仏教と女性の問題を考えていく時に、留意しなくてはならない情報が沢山含み込まれている史料である。

『 女人

成仏 血盆経縁起 完

下總一部村

正泉寺蔵板 』

女人成仏血盆経縁起

夫原それたちぬらに一百三十六ちしやくろく地獄うちの中に血盆地獄けつぽんぢごくと言いておそろ敷たてよこひろ地獄あり、縦横たてよこひろ広さ八万由旬はちまんゆじゆんなり、然しかに此地獄ハ一切の女人業ごうを作るに依よつて墮所おつるの地獄なり、其所以そのいふゆゑハ如何いかん、女人の胸むねの間に八葉えふの蓮花れんげあり、逆さかさまに生なまし逆さかさまに開ひらか故ゆゑに胸の間むねより血ちを出です、其色そのいろ五色ごしきなり、就な中なか赤色あかいろの血流ちながるる事一月ひとつきに七日あり、十二月ふたつきの間に八十四日はちじゆくなり、是を以て名なて月水げつすいといふ、大惡おほあく不淨ふじやうの水也みづなり、然しかるに此惡水このあくみづ大地ちちに落おれハ地神ぢじんの頭かみを汚けがす故ゆゑに、九万八千七拾二きゅうばんはちせんしちじゆにの神かみの罰ばつを蒙かかり、若水中わかしちゆうにすつれハ水神みづかみをけがし、山林さんりんに捨すれハ山神やまかみを穢けがす、或あるひハ穢けがれたる衣裳いしやうを川水かみづにて洗濯せんたくする時、

其川下の諸の善人は是をしらずして此水をくみ茶を煎じ飯を炊き、仏神に供養するに仏神是を請給はず、自然に仏神を穢が故に女人命終の後」皆此血の池地獄に落ずといふことなし、惣て女人ハ嫉妬の心深く重して、現在の時少善菩提の功德なく、或ハ邪淫を犯し悪行をなす故に、死てハ大身の毒蛇となり頭に十六の角を戴き、身にハ八万四千の鱗を帯、昼夜三熱の苦悩を受ける事無量也、忝も目蓮尊者ハ是を悲給ひて一切の女人を憐れ不便と思めし救んがため我

釈迦牟尼仏へ歎き奉り給ひて此御経を説示し給へる也、是によりて血盆経共名付、又女人成仏経共云也、若末世の女人縦仮十悪五逆の罪を作る共、此血盆経を受持し誦誦せば決定して此地獄に落る事なし、豈況や書写の功德においてをや、仏の説給ひし教経女人成仏の因縁ハ此経に限るのミ、縦極悪の女人成共此御経を受持誦誦せば成仏疑なし、殊更現在にて七難三災の苦を除き、未來ハ八難五障の罪を遁れ九品蓮台に至らん事何の疑か是あらん」茲に伝へ聞、下総國中相馬郡一部村の古名を発戸村と云、其村に寺有法性寺と号す、然に彼寺に不思議有り、頃ハ応永廿四年四月廿八日、村の旦那の娘、年の頃は十三才になりけるが、俄に狂數病付て殊更其姿尋常に異なり腰より下ハ紅のこたく、頭上五色の火煙を出し、あゝくるしやたへかたやと空中に飛上り転び啼き呼びけり、父母あまりに悲驚して仏神に祈り、医師を頼、陰陽師を招き是を占といへ共更に其験なし、皆其故をしらず、時に彼病人口走り申けるハ法性寺の和尚に對面して直に願度事有、急て法性寺の和尚を請待し給へと、父母是を聞て則法性寺へ使を遣し和尚に斯といふて和尚を請待す、和尚しはらく有て来る、時に彼病人迎に出札拝恭敬していふ、和尚我を知るや大善知識吾がいふ事必疑事なかれ、吾今宿因を語るへし、我ハ是最明寺時頼が娘尼御察法性といふ比丘尼、法性寺開闢の住持也、故に我父最明寺今の法性寺を建」立して吾名を形取て法性寺と号す、吾

比丘尼と成といへ共身の榮花に誇り三業をつゝしまず持戒修善の功德なく徒に光陰を送れり、哀哉時不レ待レ人よはひ七旬に及て命終す、地獄の道にハ貴賤の差別なく現在になす悪業故血盆地獄へ落て無量の苦を受、其上宿因の業縁に依り手賀水中の蛇身と成、頭に十六の角を戴き三熱の苦惱止事なし、又血の池地獄の苦をうけ、和尚若吾言を疑ハ、其印しを見せんと紙拾枚斗取、手つから其身を撫ひけれバ紅のごとく染にけり、是を見給へ、苦哉悲哉やとしばらく消入やうに啼泣す、其時和尚問て曰、扱血盆地獄の様子ハ如何なるや、良有ていハく、此地獄といふハ一度女人と生を受たるものハ縦大名高家の息女たりとも此地獄通るべからず、其故如何となれば諸の女人月水の垢穢其上子を産時不浄の血流れて地神山神水神及び惣て一切の仏神を汚か故に命終の後此地獄に墮苦を受ること」無量也、扱此地獄の苦にハ昼夜六度の呵嘖にて血氷を吞せらるゝ、吞んとするにおそろしく否とうつ伏、其時ハさもすまじき鬼共来て鉄杖にて打さいなみ、又血の池へ追込れ呼ハんとするに声いせず、扱血の池の内にてハ鉄の嘴有無量無辺の虫共が皮を破り肉に入血を吸出し骨を碎き髓を喰、此時のくるしミ中々言葉のべがたし、或時ハ血の池に五色の蓮花化現して仏果に至る人も有、見るに中々うらやましく、或ハ現在の作業により一旦地獄に落れ共其娑婆に有し時、善根功德をなす故に早速地獄を出るも有、又命終の其後に世にある子孫供仏施僧代をなす故に其功德により地獄を出て天上する人も有、願くハ和尚大慈大悲吾を助て血盆地獄の苦悩を脱しめ給へと、和尚曰、其血盆地獄の苦患如何なる作善にて遁れしめん、病人曰、凡釈尊御一代五千余卷の經文を説給といへ共報恩經の「内血盆經と云御經有、此御經を七日の間毎日一千卷ツ、誦誦し書写し給ハ、血盆地獄の苦を脱するのミならず今現身の蛇身共に脱するならん、吾斗りにあらず、惣て末世の女人此地獄の苦を出離せんと思ふ人ハ此經を受持すべし、然ハ昼夜六度の責を通るべし、現在の女人ハ肌の守に掛け、死たる女ハ

其墓に納むへし、血盆勝会の齊日とて壹月に二日ツ、勤へき齊日は六根清淨にして是をとむべし、其功德甚深し、若又亡母のため妻のため娘のために此経を受奉りて其塚に納る時ハ其精靈三惡道の苦を遁れ、かならず仏果に至るなり、和尚早々帰寺して此経を誦誦し書写し給へ、なほも吾いふ言疑ひ給ハ、寺の後に五輪の石塔あり、是吾遺骸を埋めし所、塚の印に松栞本柳栞株植置かれ、その五輪の石塔に不思議有べし、行て見るべし、其時尚愕然としていハク「汝の願のごとく血盆経誦誦すべし、其経求るに日あるべし、其時病人いハク、吾教へ奉らん、法性寺の本尊地藏菩薩ハ吾父最明寺殿安置せられ殊更靈感あらたましませバ、早速かへりて本尊へ祈り奉り求むべしといふて病人ハうつぶしに伏、前後しらず寝入ける、是より病氣平愈せり、和尚いそぎ帰寺して鐘をならし大衆を集め、右の因縁を告て僧衆連て寺の後にいたり尼御寮の石塔を見給ふに五輪の下朱に染けり、和尚僧衆いよ／＼不思議の思ひをなし、其日則地藏講会を執行し講会終りて通夜禅定三昧に入給ひ、線香八本過て随意に睡眠をなし、和尚ハ猶も志願深く南無六道能化地藏願王菩薩我に血盆経をあたへて迷妄の衆生を度せしめ給へと一心に礼拝恭敬して、又深く禅定に入給ひけり、丑の時を過寅に及びし頃少々すゐミン給へハ難有も地藏菩薩八旬に及べる」老僧と現して手に錫杖を持ち、威光かくやくとして来り告て宣く、汝仏誓に順て衆生を度せんとの志願ふかく今吾に祈、是に依て龍宮界に納むる所の血盆経汝にあたふべし、来日早朝急ぎ手賀浦に行て見るべしとて夢ハ則覺にけり、和尚則翌日未明に僧衆を引て手賀浦に至りて見るに、不思議や水中俄に動揺して水の涌くことあだかも龍門のたきのことし、その水底より白蓮花一茎涌出し蓮花の中に一卷の経文あり、和尚是を見て夢中に地藏尊を授給ふ血盆経と礼拝頂受して則寺に帰り、夫々七日の中僧衆と共に毎日血盆経一千卷ツ、誦誦し書写して尼の墓所へ納られけり、七日満ずる夜半に和尚僧衆檀家共に同夢見られけるに、虚空に花ふり音楽

聞え紫の雲たなびき嬋娟たる女人香色の衣を着、光明を放、蓮台に座し唱へて」曰、法性寺の和尚頃日血盆経を
読誦し書写し給ふ功德により我既に血の池の苦を遁れ蛇身を脱して直に弥陀の浄土へ往生すと、明日各夢を語る
に露たがわず、則経文一部涌出の因縁により村名を一部と改、蛇身を脱したる故に寺の山号を大龍山と名づけ、
水泉涌出の事に依て法性寺を改正泉寺といふ、今に此寺に旧跡あり

日本最初女人成仏血盆経出現第一道場

下總州相馬郡一部村

大龍山正泉二十八世

真宗克文敬再撰

印
印

尾州御大奥為

御祈禱令開板者也

維時天保九戊戌歲

十月吉祥日

- ①由旬(ゆじゆん) インドの距離の単位で帝王が一日に行軍する里程とされる。中国の里程では、四十里・三十里・十六里、また八十里・六十里・四十里などの諸説がある。
- ②三熱(さんねつ) 畜生道で竜・蛇が受ける三つの苦しみ。熱風に骨肉を焼かれること、悪風に居所や衣服を奪われること、金翅鳥(こんじちやう)に食われること。
- ③無量(むりよう) はかり知れないほど多いこと。
- ④目蓮(もくれん) 目連のことか。摩訶目犍連の略称 釈迦の高弟 神通力では仏弟子随一といわれ、地獄におちた母を救うため施餓鬼会を行った。孟蘭盆会は、この故事にはじまるといわれる。
- ⑤釈迦牟尼(しゃかむに) 釈迦の尊称 釈尊。
- ⑥十悪(じゅうあく) 人間の基本的な十の大罪 殺生・偷盜(ちゆうとう)・邪淫・妄語・綺語(きじ)(言葉を巧みに偽り飾る)・両舌・悪口・貪欲・瞋恚(しんい)(憎悪する)・邪見の総称。
- ⑦五逆(ごぎやく) 五つの最も重い罪 小乗では、殺母・殺父・殺阿羅漢・出仏身血(仏身を傷つけること)・破和合僧(教団を乱すこと)をいう。大乘では、寺塔や経像などの破壊、三乘(衆生が煩惱の世界から菩提の世界に達する三つの方法。声聞乘・縁覚乘・菩薩乘)の教法をそしること、出家者の修行を妨げること、小乗の五逆の一つを犯すこと、業報を無視して悪業をなすこと。

⑧七難（しちなん） 七種類の災難 諸説あるが、「法華経」では、火難・水難・羅刹（人の肉を食う）難・刀杖難・鬼難・枷鎖（かき）（くびかせとくさり、罪人をつなぐ刑具）難・怨賊難（おんぞく）。

⑨三災（さんさい） 住劫（世界と生物とが安穩に続いている期間）の一定の時期におこる小三災（刀兵災・疾疫災・飢饉）と、壞劫（世界が崩壊していく期間）の末期におこる大三災（火災・風災・水災）。

⑩八難（はちなん） 仏を見、正法を聞くことを妨げる八種の苦難・境界 地獄・畜生・餓鬼・長寿天・盲聾瘖啞・辺地（極楽浄土の片隅の地）・世智弁聰（世智にたけていること、こざかしいこと）・仏前仏後の称。

⑪五障（ごしょう） 女性であるが故に、梵天・帝釈天・魔王・転輪聖王・仏身の五つの地位を得ることができないということ。

⑫九品蓮台（くほんれんだい） 極楽浄土にある蓮の葉でできた台 往生すればその上に生れ出るといふ。九等の階位がある。

⑬宿因（しゆくいん） 宿縁に同じ 前世の因縁。

⑭最明寺時頼（さいみょうじときより） 北条時頼（一二二七〜六三） 鎌倉幕府五代執権 最明寺は鎌倉にあった。時頼建立 時頼は、こゝで出家したので最明寺入道と称された。

⑮比丘尼（びくに） 出家し、定め戒を受け正式に僧となった女子 尼僧。

⑯三業（さんごう） 身体の行為である身業、言語表現である口業、心のはたらきである意業の三つ。

⑰持戒（じかい） 戒を守ること。

⑱光陰（こういん） 光は日、陰は月 月日 歲月。

⑲ 月水（げつすい） 月経。

⑳ 呵責（かしやく） 呵責 責めとがめる。

㉑ 化現（けげん） 神仏などが姿をかえてこの世に現われること。

㉒ 善根（ぜんこん） よい報いを受ける原因となるおこない。

㉓ 功德（くどく） よい果報を得られるような善行。

㉔ 作善（さぜん） 善根を行うこと 堂塔・仏像の建立・造営、写経・法会、追善供養などを行うこと。

㉕ 受持（じゅじ） 仏の教えを銘記して忘れないこと。

㉖ 齋日（さいにち） 在家の仏教徒が八戒（出家生活にならって守る八つの戒め 不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不飲酒の五つに、装身・化粧をやめ歌舞を視聴しないこと・立派な寝台に寝ないこと・非時の食をとらないこと）の三つを加えた戒）を保って精進する日。

㉗ 六根清浄（ろっこんしょうじょう） 六根（六つの根 眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根の総称）の執着を断ち、清浄な精神をもって靈妙な術を修得すること。

㉘ 三悪道（さんあくどう） 死者が悪業のために行く地獄道・餓鬼道・畜生道の三つの世界。

㉙ 五輪塔（ごりんとう） 平安中期以後供養塔として用い、鎌倉以後墓標として広く用いられる 密教で説く五大を表す五つの形から成る塔。地輪（四角）、水輪（円）、火輪（三角）、風輪（半月形）、空輪（宝珠形）の順に積み上げる。

⑳ 禪定三昧（ぜんじょうさんまい） 精神をある対象に集中させ、宗教的な精神状態に入ること。

③①六道(ろくどう) すべての衆生が生死を繰り返す六つの世界 三悪道(前②⑧参照出)と三善道(修羅道・人間道・天道)の六道。

③②能化(のうげ) 師として人を教え導く者 衆生を教化する仏・菩薩をいう。

③③丑の時(うしのとき) 現在の午前二時頃。

③④寅(とら) 現在の午前四時頃、又は午前三時から五時、午前四時から六時ごろ。

③⑤八旬(はちじゆん) 八十歳。

③⑥嬋娟(せんけん) あでやかで美しい。